

#02_こういう事されるの期待してたんでしょ？

「はあ…」

「シャワーまで浴びさせてくれるなんてね。それに服も…」

「正直、助かりはしたけどさ…別に、そこまで期待してなかったから。寒いのとか慣れてるし…」

「まあ、濡れた服で部屋を汚されるのは嫌か…」

「でも、私の服まで洗濯するとか、何？」

「そこまでしてもらう義理とかないし、適当にビニール袋にでも
詰めといてくれればいいんだけど…」

「はあ…そ、あんたの中ではそうなんだ。なら、これ以上は言わない」

「やってもらってる立場な訳だし」

「でも、だからって…愛想良くするとか、サービスを丁寧にするとか、しないから」

「は？」

「いやいや、ここまで来てまだとぼけるの？」

「こういう事、させるつもりだったんでしょ？」

「ちょっと、暴れないでよ。やりづらい…てか、何？ 本当にそんなつもり無いの？」

「嘘でしょ。家出した女なら、簡単にやれるって…そういう下心でしょ」

「わかってるんだから…抵抗しないで…ほらっ…！」

「チッ…やっぱり、綺麗事言っててもさ…こっち、大きくなり始めてんじやん」

「そういうのいいから。こっちだって覚悟してるし」

「あんたから無償で施しを受けるつもりなんて、ないんだから…」

「泊めてもらう分は、身体で返す。それだけ」

「だから…ほら、そのまま動かないで」

「あとウジウジ言うな。集中できないから」

「ん、じゃあ…はじめるから」

「ふう、ふう…ふう…触られただけでさ。すぐ大きくなるじゃん」

「さっきまで散々言ってた癖に…はあ…」

「ん、だからいいんだって、これは私なりのけじめなんだから…」

「ふう、ふう…ん、ふう、はあ、はあ…」

「ていうか…ん、何…？ まだ大きくなるの？」

「ふう、ふう…んつ、ふう…ふう…はあ…普通じゃない、気がするんだけど…」

「ここまでなるとか、知らないし…」

「ふう、ふう…んつ…はあ…ふう…ちょっと休憩」

「腕、動かすの疲れるの…」

「それに痛むし…」

「別に、あんたには関係ない」

「ちょっとやり方、変えるから」

「っしょっと…はあ」

「すんすん…んつ、汗臭つ…」

「まあ、お風呂入ってなきゃそもそもなるか…はあ…」

「何しようとしてるかって？ 決まってんじやん」

「手だと疲れるから、口使うの」

「私がどうしようが勝手でしょ。指図されるいわれはないし」

「いいから、あんたは黙ってされてればいいの」

「ふう、ふう…んつ…はあ…んつ…チュツ…」

「チュツ、チュツ…んつ…はあ、ふう…」

「はあ、はあ…まだ、口に入れるための準備…できてないだけだから」

「んつ…そんなジロジロ見ないでよ。鬱陶しい」

「んちゅつ、チュツ…チュツ…チュウ…んう…はあ、はあ…」

「チュツ、チュツ…チュツ、チュウウウ…んふつ…」

「ふう、ふう…チュウウウ、れる…れる…んちゅ、れる、れる…」

「れるれる…れるれる…ふう、ふう…れるれるれるれる…」

「ふう…ん、よし…そろそろ…はあ～…ふう～…」

「んつ…チュウ、んりゆりゆ～…」

「んふう～…ふう、ふう…んつ…んりゆう…んふう、ふう、ふう…」

「んつ…ふう、れるれる、れろれりゅ…れる、れろ…れるれる、れろりゅ…」

「ふう、ふう、れろれろ、れりゅれろ…れりゅる、れる、れる…れろ、れる…」

「ふう、んつ…！ れる、れろ、れる、れろれろ、れるりゅ…んう…ふう～」

「ふふう、はあ、はあ…はあ…」

「あんまりこっち、見ないでほしいんだけど…気が散るし」

「ん、ふう、ふう…んじゅう、じゅるりゅりゅ～…んふう～…」

「ん、んる、るれりゅ、れる、れる…れろれゅ…んつ、んつ…れるれる…」

「んふう、ふう、ふう、れるれる、れろれる、れる、れる、んふう、れるれる…」

「ふう、はあ、ふう…んつ…ふふう～…はあ、はあ…はあ…はあ…」

「ん…私の心配とかしなくていいから」

「ていうか、ここをこんなにしながら善人ぶるの、ムカつくからやめて」

「どうせ内心、喜んでるんでしょ？」

「他人なんて、信頼できないし…したくもないの」

「ま、いいんだけど。私は私がやるべき事…するだけだし…」

「んふう、ふう…ん～…んつ！ ぐぷぷう…！ んぐっ…！ んう、ふう、んんつ…！」

「んつ！ んうぐ！ んんんつ…！」

「んんつ、んぐう、ぐつ…ぐう…んぶつ、んぐじゅりゅ…んじゅ、んんつ…」

「んうつ…！ んぐっ！ んんうう！ んぶつ、んつ！ んう！ んふう！」

「んつ、ぐっぽ！ ぐぽ！ ぐっぽ！ んぐうっぽ！ んふう！」

「んぐっ、ぐつ！ んふう！ んぐ！ んぶう…つ！ んつ！」

「ぐっぽ！ ぐっぽ！ ぐぷぷつ！ んつ！ んぶつ…んつ！ んぐっ！ ぐううう…！」

「んう…ふはあ…はあ、はあ、はあ…はあ…！　はあ、はあ…」

「んうぐっ…やっぱりあなたの、デカすぎ…るし…」

「はあ、はあ…奥まで咥えようとすると…苦しくなるじゃん…」

「んつ、はあ、はあ…んつ…はあ？　あんた、ここまでされて…まだそんな事言う？」

「ふう、ふう…偽善者ぶって、ホント嫌い」

「あんたの化けの皮、絶対剥がしてやるんだから…」

「ふう、ふう…」

「はあ？　決まってんじやん」

「あんたみたいな偽善ぶってるやつが…ただの性欲まみれの獣だってのを…証明してやんの」

「ふう、ふう…んつ、ほら…！　挿れたいんでしょ？」

「さっきよりも反応してるし…」

「いいよ、認めるなら挿れたげる。自分が偽善者だって事を、認めたらさ」

「はっ…？　まだ抵抗すんの？」

「ここまでやつといて？　本当、ありえない…」

「セックスが愛してる者同士でやるなんてさ、幻想だよ？

少なくとも私は知らないし、知りたくもない」

「ふう、ふう…じゃあ、そこまで言うなら…これ、耐えられるよね？　耐えてみせてよ」

「ふう、ふう…んつ…ふう、ふう…」

「んんつ！　んつ、くうううううつ…！」

「はあ、はつ、はあ…んんつ、くつ…やっぱり、大きすぎ…くつ…はあ、はあ…つ！」

「べ、別に…濡れて無くても…これくらいの痛みとか、全然…平気、だし…っ！」

「それよりも、あんた…よ」

「別に愛し合ってる同士でもないんだし、私の身体が目当てじゃないって言うんならさ…これ、耐えられるはずでしょ…」

「ふふつ…今から楽しみだわ。あんたの本性が、露わになるところ…見るのが、さあ…！」

「んんつ！　んんつ！　んつ！　んつ！　ぐつ！　ふつ！　ふつ！　んんつ！」

「ふう、ふう…んんつ！　はつ…んう、んつ、んんつ、はあ、ふう、んつ…」

「ふう、んつ…はあ、ふうつ…んんつ、んつ…！ やっぱり…」
「口では散々止めてくる癖に…されるがまま…んんつ！ じゃないつ…！」
「それに…汚い汁…ダラダラ流して…さつ…はあ、ふう…！」
「んつ…んつ、どんどん…滑り、良くしてくるじやん…んふう、はあ、はあ…」

「やっぱり…んつ！ んつ！ あんた…下心…あったんじやん…！ はあ、はあ、んつ！
そろそろ…認めた…らあつ…！」

「ん、ふう、はあ…ふうつ…！ ジャア…これは…私が出してるって…？」
「そんなわけ…ふう、ふう…んつ…無いし…！ んんつ！ んうつ！」

「そうやって…さあっ！ 自分が追い詰められたら…人のせいにするの…んつ！
ふつ…ふう…！ 最低…つ！」
「はあ、はあ…んつ…でもさつ…！ 口では何言ってもつ…んつ！ んつ！」
「中に出したら…んつ、出しちゃったら…んふつ…はあ、ふうつ…！ 無駄…だよねつ…」

「んつ、んんつ！ だから…出させてあげるよ…私の中にっ…んつ！ んんつ！」

「あんたが、いい人のフリをして、初めて会った女の子を…んつ！ 家に連れ込んで…！
んうつ…はあ、はあ…」
「中出しするような、最低なヤツだって…認めさせて、やるんだからっ…んうつ…！」

「んうつ…んつ！ あうつ…んつ！ んうつ！ はあつ！ はあつ…！ ふうつ…！」
「ふう、ふう…んつ！ 大きくなってきてる…じやんつ。はあう、ふう、ふう…」
「ほら、認めなよ…っ！ 自分が偽善者だって…っ…！」

「んつ、んんつ！ はあ、はあ、ふううつ…！」
「ほら、認めろっ！ 認めろ！ 認めろ認めろ認めろ！ んんつ、ふう…んんつ！」
「認めるまで…絶対にやめないつ…からつ…！ んつ！ ああつ！ はあ、あつ！」
「んんつ！ ふう、んつ…大きくなつてつ…！ ふうう…！」

「んん、何？ 出す気？ 出しちゃうの？」
「そしたら、口で認めなくても…んつ！ 認めた事になるけど…！ いい？」

「はあ、はあ…私は…んんっ！ それでも、いいけどね…っ！」
「あんたからの借り…十分、返せるし…！ はあ、はあ…フフっ…」
「ムカつく気持ちも、落ち着く気がするしい…んんっ！」
「ほら、出しちゃえ…出しちゃえっ！」
「中に…偽善者精液、全部、だーセっ！」

「んんっ！ あっ…！ んんんんんんっ！」

「はあ、はあ…てる…全部、んんう♡」
「はあ、はあ…まだてるし…ふうう…もう、止める気も無いじゃん」
「んっ…溢れるぐらい出して…ホント、獣じゃん…はふう…」

「は…？ 何、あんた…まだそんな事言ってさ…」
「あくまで認めないつもり？ ていうか、説教とかやめてほしいんだけど…」
「はあ、本当に強情だね…あんた。ここまで頑固なのは、会った事ないかも」

「じゃあさ、あんたが教えてくれる？」
「人を愛するって事がどういう事か…そこまで言うんならさ、できるはずでしょ？」

「ふん、私みたいなのには無理か。どうせ、内心下心しかないんだろうし」
「ん…今の言葉、忘れないから」
「じゃあ、しばらく泊めさせてもらうからさ」
「せいぜい、いい人のフリしたらいい」
「私は愛なんて信じない…だから、期待はせずに過ごさせてもらうから」